

## ミュージアム研究員紹介

### 西岡佑一郎主任研究員

西岡佑一郎



写真1. “良い化石”を見極める能力が試されるフィールド調査

なかなか見つからなかったパズルのピースが突然見つかった時、何物にも変えがたい喜びを味わったことがあるでしょうか。化石研究の面白さがそこにあります。化石の研究者になる人は、子供の頃から化石探りが好きだった人や生物が好きな人などが多いかと思いますが、かく言う私もその一人。しかし、それ以上に私は大航海時代の博物学者、例えばチャールズ・ダーウィンのような生き様に憧れ、古生物学者を目指しました。目で見た発見を記録していくような古典的研究ではありますが、生物の多様性や進化を理解するためには必要不可欠な工程であり、現代も記載分類学として重視されています。自身が極めた生物群を淡々と分類していく様はまるで職人芸。そんな記載分類屋の世界に魅力を感じ、古生物学の研究を始めました。

私は学部時代から一貫して哺乳類化石の研究を行ってきました。京都大学大学院に進学してまもなく、同大学霊長類研究所を主体とするミャンマー古生物調査隊に加わり、それ以来毎年ミャンマーで化石の発掘調査を行っています。私の研究対象である新第三紀のイラワジ層（約1000～300万年前）は、ミャンマー中部を縦断するイラワジ川によって形成された広大な堆積層であり、陸生脊椎動物の化石が大量に発見されています。

発掘した化石は霊長類、食肉類というように各分類群の専門家が分担して記載研究を進めて



写真2. 記載分類はスケッチからはじまる

おり、私は小型哺乳類（げっ歯類）とウシ科を担当しました。げっ歯類は日本の第四紀哺乳類化石の研究を通して基礎的な知識を備えていたためであり、ウシは“残り物”だったからです。実際のところ産出化石の70%はウシ科であり、これを整理・分類することでミャンマーの新第三紀哺乳類相と古環境の解明に大きく貢献できるという“福”が付いていることを理解した上でのチャレンジでしたが、まさかこの福を得るために10年間も費やすとは思っていませんでした。この間、私がウシ科のデータを収集するために訪れた海外の博物館は15館に及び、その成果として、新第三紀後半の環境変化と東南アジア大陸部の動物相の隔離プロセスを結びつける重要な化石証拠の発見に至りました。

東南アジアでフィールド調査をしていると、村や博物館の人々が山盛りの化石を持ってきて鑑定を依頼されることがあります。現場では“良い化石”を見極めた上での的確なアドバイスが求められますが、そのような能力もこの10年間の調査経験により養われました。古生物研究の醍醐味は化石探し！現地における化石との“ファーストコンタクト”は色々なアイデアを生むきっかけになるため、大航海時代の博物学者の如く、じっくり丁寧に観察するところから始めるようにしています。「ふじのくに」でも、各地を自分の足で巡って面白い発見を探したいと思います。